

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（4）

# 新番所後遺跡

県立指宿養護学校新設に伴う発掘調査報告書

1977・2

鹿児島県教育委員会

## 序

鹿児島県教育委員会では、昭和49年度に実施された県立指宿養護学校建設に伴い、当該事業区内の新番所後遺跡について発掘調査を実施しました。

ここに、その調査結果を報告書として発行いたします。この報告書が、広く文化財愛護のため十分活用されることを念じています。

なお、発掘調査に当たって、指宿市教育委員会並びに地元関係者の御協力をいただきしたことに対し、厚くお礼申し上げます。

昭和52年2月28日

鹿児島県教育委員会

教育長 国分正明

## 例　　言

- 1 本書は県立指宿養護学校の新設に伴う埋蔵文化財の試掘ならびに発掘調査報告である。
- 2 発掘調査責任者　　文化課長　　犀川継吉（現県立鹿児島工業高等学校長）  
発掘調査者　　文化課専門員　　河野治雄  
　　　　　　　　文化課主事　　長野真一  
　　　　　　　　補助員　　佐土原逸男
- 3 本書の執筆は、長野真一が行い、実測図等の作成は、戸崎勝洋、中島哲郎が補助した。
- 4 本書に用いたレベルの数値は、海拔絶対高である。
- 5 本書では、土器、石器は通し番号とし、実測図と図版の番号は一致する。

## 目 次

第1章 調査の経過 .....	1
第2章 遺跡の立地と環境 .....	2
第3章 A トレンチの調査 .....	5
1. 層 順 .....	5
2. 出土遺物 .....	5
第4章 B・C トレンチの調査 .....	8
1. 層 順 .....	8
2. 層 順 .....	8
3. 出土遺出 .....	8
第5章 D トレンチの調査 .....	9
1. 層 順 .....	9
2. 出土遺出 .....	9
第6章 E トレンチの調査 .....	10
1. 層 順 .....	10
2. 出土遺物 .....	10
第7章 H トレンチの調査 .....	14
1. 層 順 .....	14
2. 出土遺物 .....	14
第8章 I トレンチの調査 .....	15
1. 層 順 .....	15
2. 出土遺物 .....	15
第9章 特別地点の調査 .....	19
1. 層 順 .....	19
2. 出土遺物 .....	19
第10章 まとめ .....	24

## 挿図目次

第1図	新番所後遺跡および遺跡分布図	3
第2図	遺跡周辺地形図	4
第3図	Aトレンチ東壁実測図・出土遺物実測図	7
第4図	B・Cトレンチ北・南壁実測図・出土遺物実測図	8
第5図	Dトレンチ北壁実測図・出土遺物実測図	9
第6図	Eトレンチ西・中央壁実測図・Pit群	12
第7図	Eトレンチ出土遺物実測図	13
第8図	Hトレンチ東・西壁実測図・出土遺物実測図	14
第9図	Iトレンチ東壁実測図・出土遺物実測図	16
第10図	Iトレンチ出土須恵器実測図	17
第11図	Iトレンチ出土遺構実測図	18
第12図	特別地点遺物出土状況と土層図	21
第13図	特別地点出土遺物実測図	22
第14図	特別地点出土遺物実測図	23

## 図版目次

図版1	Dトレンチ調査風景・土層	25
図版2	Iトレンチ調査風景	26
図版3	Iトレンチ東側土層	27
図版4	IトレンチPit群	28
図版5	Iトレンチ須恵器・土師器・縄垂車出土状況	29
図版6	特別地点遺物出土状況	30
図版7	特別地点遺物出土状況	31
図版8	Aトレンチ出土土器・石器	32
図版9	C・D・Eトレンチ出土土器	33
図版10	Eトレンチ出土土器	34
図版11	Iトレンチ出土土器	35
図版12	特別地点出土土器	36
図版13	特別地点出土土器	37
図版14	特別地点出土土器	38

## 第1章 調査の経過

鹿児島県立指宿養護学校の新設を進めていた鹿児島県教育府振興課（養護学校事務局）の要請に基づいて、同校敷地内における文化財の分布調査が文化課の河野治雄により、昭和49年6月6日に実施され、弥生式土器片の存在が確認された。その結果に基づいて、振興課とその対策を協議し、敷地の変更を行い、その変更された部分を中心に再度、昭和49年7月23・24日の両日、文化課と振興課との両者で分布調査を実施することになった。その結果、弥生時代中期から弥生時代後期にかけての遺物が確認されるとともに、遺物包含層も推定された。

これらの調査をもとに文化課・振興課（養護学校事務局）との間で協議を行い、これらを受けて昭和49年10月11日より確認調査（二次確認調査）を実施することになった。この試掘調査は、河野治雄・長野真一（文化課職員）の2名が当たり、作業員20名の協力を得た。その結果、柱穴を持つ遺構が確認されたので、さらに調査の継続を行い、昭和49年11月27日より事前調査（記録保存）と確認調査を昭和49年12月27日まで並行していった。さらにその後、遺跡の拡大が推測されることとなり、加えて12月より鹿児島県開発公社が工事に着手した部分に、遺物が発見された。そこで遺物の確認された地域と工事中発見部分について、昭和50年1月8日より、同年1月25日までの期間、事前調査として発掘調査を行い、記録保存を行った。

調査にあたっては、県振興課・指宿教育事務所・指宿市教育委員会・指宿市立丹波小・南指宿中学校国立病院分校の協力を得た。

また地層の分析では、鹿児島大学地質学教室、石川秀雄教授の御指導をいただいたことを記して謝意を表します。

## 第2章 遺跡の立地と環境

新番所後遺跡の所在する鹿児島県指宿市は薩摩半島の最南端に位置し、北は喜入町、西は頬谷町、南は山川町および池田湖をへて開聞町に接し、東は断層海岸線をもって錦江湾にのぞんでいる。

これら市町村が所在する南薩地域は各種型式の火山、温泉群の宝庫でもある。

すなわち現在の錦江湾は第四紀初期の火山であり、その火山活動によって膨大な火山岩の流出、火山噴出物を満たし、その後の開聞岳、池田湖火山、成川火山等多数の小火山の火山活動により丘陵性の火山岩地帯を形成した。このうち開聞岳は860年（貞觀2年）、874年（貞觀6年）、1885年（仁和1年）等に噴火し、その様相も「開聞神山噴・有火自燒、煙蒸満天、灰沙如雨、震動之聲、聞百餘里、近社百姓驚恐失情……」（三代実録）とあるように、熾烈をきわめた噴火であったと思われる。

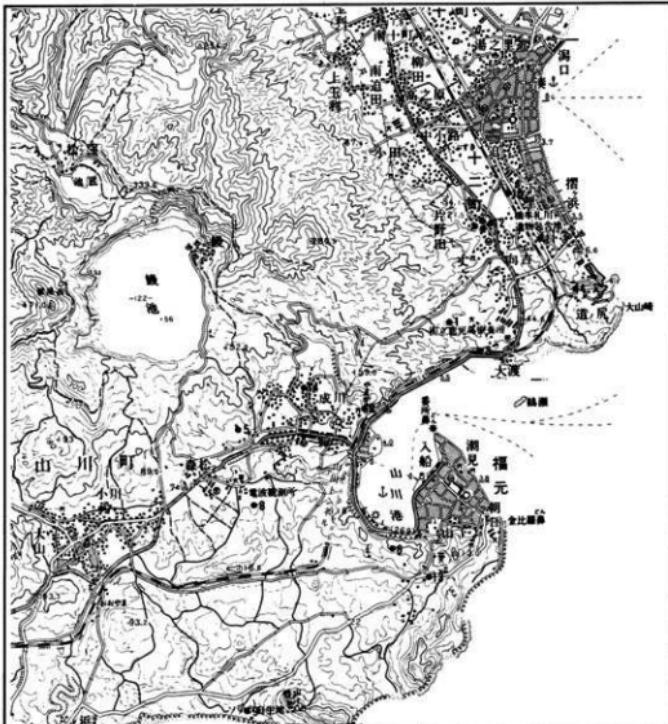
このような火山活動の為に地形は断層崖、火口湖（鏡池、鏡池、池田湖）などバラエティーに富む一方、シラス層（火山灰層）や、耕作の際、歎が火花を発するというコラ層が所により2～3mにおよぶ堆積を示すといった火山地帯特有の地質も形成している。

指宿市もこの火山地帯に属し、古来より湯の豊かな宿として「湯豊宿」と称され、転じて「指宿」と呼ばれるようになったといわれる。

このうち遺跡は指宿市街地の西南約2.0km標高約60mの丘陵地に位置し、北面に傾斜するその傾斜地およびその各部分が遺跡地である。現在は丹波小学校がおかれており、隣接して国立鹿児島療養所がある。附近の植生は、現在植林された松が主であるが、ほかに芭蕉等亞熱帶性の植物も繁茂し、暖かい気候の程を示している。

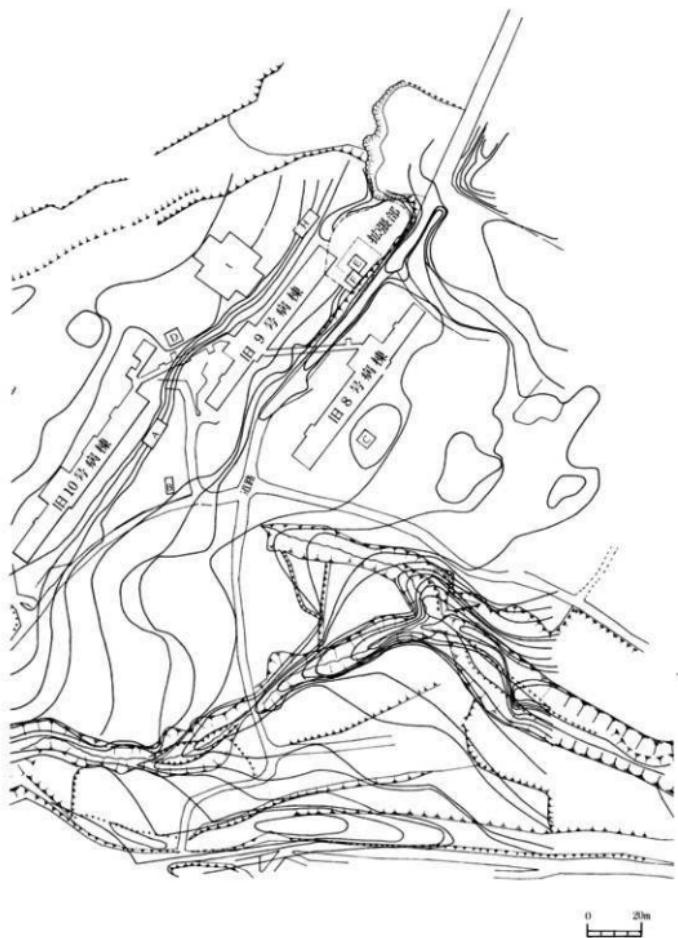
この遺跡のほか、火山帶と亞熱帶性気候の特性の中で古代の人々は生活し、多くの遺跡を残してきた。たとえば、本遺跡より北東1kmの所には火山灰層を挟み弥生式土器と繩文式土器を出土し、その前後関係が注目され、現在では学史的価値としても貴重な橋牟礼川遺物包含地（国指定史跡）をはじめ、西南0.5kmの火口壁の懸崖の地には、上層に弥生式土器、下層に指宿式土器と呼ばれる縄文時代後期の土器が出土する大渡遺跡、そのほか独特な埋葬施設、多くの人骨と、後に成川式土器と呼称され、現在にいたっても研究に欠かすことができない標準形式となった土器の出土する成川遺跡がある。

以上の代表的な遺跡のほか、南丹波遺跡、宮ヶ浜遺跡、今和泉波瀬遺跡等50ヶ所に近い遺跡が点在している。そしてこれらの遺跡のいくつかは、4mにもおよび火山灰層下によくやく弥生式土器がみられるという火山地帯独自の遺跡の形相を呈している独自性もみせている。



番号	遺跡名	時代	出土遺物	番号	遺跡名	時代	出土遺物
1	新番所後		弥生式土器・土師・須恵器	8	山根貝塚	弥生・後	彫形土器・變形土器・獸骨・貝殻
2	内山	縄文・中・後	指宿式土器	9	ぬくびら	弥生・後	變形土器
3	大浦	縄文・後	指宿式・市来式土器	10	南丹波	弥生・後	變形土器・變形土器・杯土器
4	大山崎	縄文・後	指宿式・市来式土器	11	摺ヶ浜	弥生・後	彫形土器
5	成川	弥生・中・後	須恵式土器・費柄・高杯・鉄劍	12	横手川	縄文・弥生	
6	福元洞窟	弥生・後	弥生式土器・骨角器・石器	13	福元	土師・須恵	須恵器・銅鏡
7	老田道	弥生・後	彫形土器	14	神方	土師・須恵	須恵器

第1図 新番所後遺跡および道路分布図



第2図 遺跡周辺地形図

### 第3章 Aトレンチの調査（第3図）

試掘トレンチの第1号として、旧10号棟（病棟）の東南部に10×2.0mを設け確認調査を始めた。その後拡張を続け、最終的に10×5.0mのトレンチになり深さは-7.0mにいたった。その結果、遺物は細片だけであり、また、散在していることがわかり密度は薄いという結論を得た。

#### 1 層 順

- 1層 表土
- 2層 客土・表土層とともに病棟設立に伴い造成されたもので、ガラス片、瓦等多くの雜物を含んでいる。
- 3層 黒色の火山灰層で層としての継りがなく、サラサラしている。
- 4層 褐色の火山灰層
- 5層 褐色の火山灰層であるが、4層に比べて小礫が多くなっている。
- 6層 紫色熔結コラ層で小礫が混入している。この層は、古来より「火コラ」と呼ばれ、耕作を著しく遅滞させた、非常に堅いコラである。
- 7層 褐色の粒の荒い火山灰層
- 8層 青灰色熔結コラ層、通称「青コラ」と呼ばれ、非常に堅いコラである。
- 9層 褐色の火山灰層
- 10層 黒褐色の火山灰層
- 11層 暗紫色熔結コラ層で、この層は水により崩壊されており、部分的に分布していた。
- 12層 黒褐色のきめの細い火山灰層
- 13層 黄灰色のローム層で、5mm大の軽石を含む。
- 14層 砂層で青白砂と呼んでいる。
- 15層 茶褐色のローム層で、1mm大の円い軽石を含む。
- 16層 15層よりもさらに粘質の強いローム層で、この層までが開聞岳火山放出物の堆積層と呼ばれている。
- 17層 池田二次シラス

以上の層の堆積のなかで、10層を中心成川系の土器片を包含していることを知ることができたが、いずれも細片であり、その詳細をつかむことはできなかった。また、15層のローム層のなかに、数点の古い土器片を含んでいた。

#### 2 出土遺物（第3図、図版8）

1.

小形長頸壺と思われ、平底でヘラの横での調整がみられる。色調は紅褐色を呈し、焼成は

良好であるが、胎土に石英等の砂粒を多く含んでいるため、表面はザラザラしている。

2.

上げ底の台脚をもち、底面が直立した形となる。この台脚は、貼り付けと思われ、内外面は回転台を用いた水引き整形を思わせる刷毛痕がみられる。色調は黒褐色を呈している。焼成は良好であるが、胎土に多くの砂粒を含んでいる。

3.

鉢形土器の台脚部で、台脚部を貼り付けた後つくり出している。この貼り付けた一部が剥脱しているが、貼り付けた面に指頭による調整の痕を見ることができる。内外面ともにヘラによる横方向のなで調整が見られ、焼成は良好で、胎土は砂質が強くなっている。

4.

鉢形土器の台脚部で、淡褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は非常に荒く、5mm前後の石片もみられる。表面の剥脱が著しい。

5.

尖底の一部で、調整は内外面ともヘラ状のもので入念に施され、紅褐色の光沢をもった明るい色調を呈している。胎土の一部に纖維質のものを含み、一部には亀裂も生じている。

6.

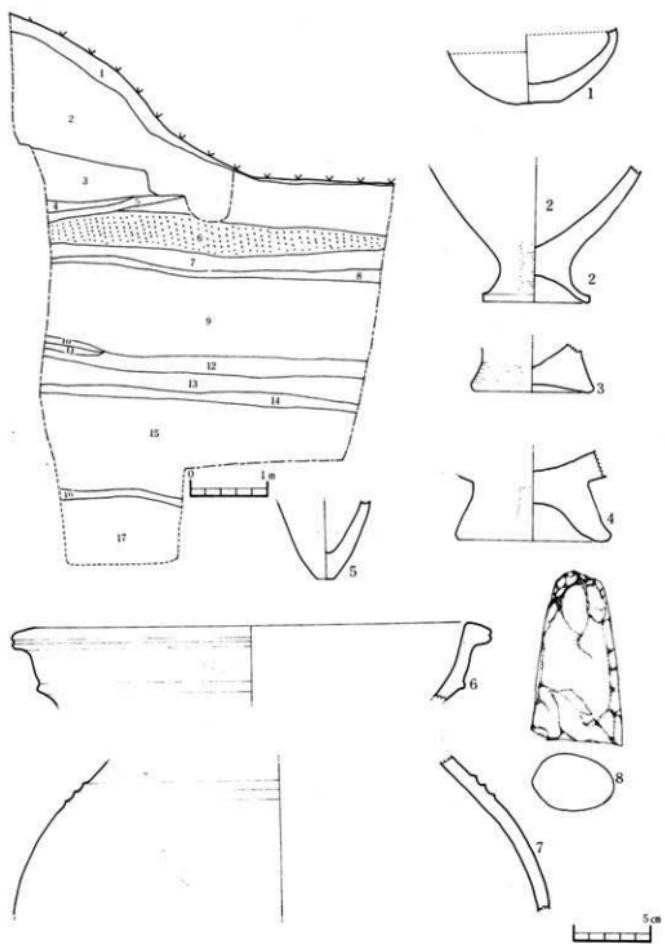
斐形土器の口縁部破片で、口縁部がL字形に外反し、一条の沈線を施している。また、頭部に2条前後の断面三角形の貼り付け凸帯をついている。胎土には多くの砂粒を含み、焼成もやや低くなっている。

7.

頭部に断面三角形の貼り付け凸帯をもつ斐形土器の胸部破片で、頭部より土は横方向のなで胸部は斜方向のなでの調整が行われている。内面は凹凸が目立っている。色調は淡紅褐色を呈し、焼成は良好である。

8.

玄武岩製の敲打技法を用いた石斧で、断面は円形に近くなっている。頭部の一部にも使用されたと思われる痕跡が残っている。刃部は欠落している。



第3図 Aトレンチ東壁実測図・出土遺物実測図

## 第4章 B・Cトレンチの調査（第4図）

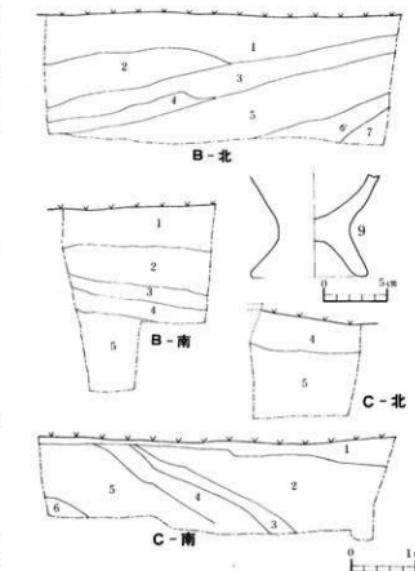
Bトレンチは校庭の南端部に位置し、当初 $2.5 \times 2.5\text{m}$ のトレンチを設け、その後 $2.5 \times 6\text{m}$ に拡張した。深さ $3.5\text{m}$ でシラス層にいたつたが遺物、遺構は存在しなかつた。

### 1 層 順

- 1層 校庭造成のための客土
- 2層 黒褐色の火山灰層で部分的に分布堆積する。
- 3層 黄灰色の粘質を含んだ火山灰層で弥生中期該当の遺物包含層と推定されたが遺物の出土はなかった。
- 4層 青白砂で部分的に堆積する。
- 5層 茶褐色（粘質）火山灰層
- 6層 6層以下シラス層となる

Cトレンチは農道をはさんでA、Bトレンチの南側に位置し標高 $58\text{m}$

m付近である。



第4図 B・Cトレンチ北・南壁実測図・出土遺物実測図

調査は $2 \times 5\text{m}$ 幅のトレンチを設定し順次発掘した。その結果深さ $2\text{m}$ でシラス層に至つた。この地区も造成が激しく層順も上部は削平、地形的にも急傾斜であったため擾乱がめだつた。

### 2 層 順

- 1層 造成のための客土でガラス等の雑物が多い。
- 2層 黒褐色の火山灰層で東に傾斜している。
- 3層 黄灰色のやや粘質を含む火山灰層でやはり東に傾斜している。
- 4層 茶褐色の粘質をもつた火山灰層で傾斜は同じである。
- 5層 シラス層である。

### 3 出土遺物（第4図・図版9）

9.

脚台付鉢形土器で胴部内面にはヘラによる絞位のなで調整がある。胎土は石英、黒雲母などの砂粒を含み焼成も良くない。剥落がめだち表面はザラザラしている。色調は赤褐色である。

## 第5章 Dトレンチの調査

Aトレンチの北東部標高65mの地点に位置する。

調査は5×5mのトレンチを設定して土層より順次発掘した。

この調査地点は病棟使用時代に使用された薬ビン等を投げ込んだ掘込みが2ヶ所に存在し、しかも3層まで達していた。

### 1 層 順（第5図）

1層 表土層でこの表土は火山灰と腐植土で層を形成している。

2層 黒色火山灰層である。

3層 紫色熔結コラ層、いわゆる「火コラ」である。

4層 黄褐色でやや粘質がかつた火山灰層である。

5層 青灰色熔結コラ層、いわゆる「青コラ」である。

6層 深褐色中粒火山灰層で、この層は層自体では綿りがなくザラザラしている。

7層 褐色の中粒火山灰

8層 暗紫色コラ層

9層 黄灰色のやや粘質をおびた火山灰ローム層である。

10層 茶褐色の粘質をおびた火山灰ローム層である。

11層 シラス層で池田湖2次シラス層

12層 砂層

13層 シラス層で鉄分をふくむ池田湖1次シラス層

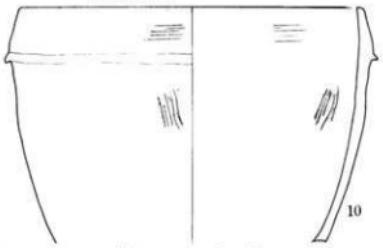
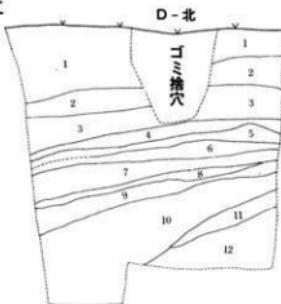
### 2 出土遺物（第5図）

10.

頭部に断面が台形の貼り付け凸帯を有する變形土器片である。

口縁部は横位のナデ調整、胴部以下は縦方向のナデ調整で仕上げてある。

色調は淡褐色を呈し、焼成は良好である。



## 第6章 Eトレンチの調査（第6・7図）

10月28日より、試掘調査を開始し、柱穴と思われるPit を検出し、その確認のためEトレンチに平行して、Fトレンチを設けた。

その結果、5個のPit群を確認し、それに伴い数点の土器片を出土した。その結果に基づいて、400m<sup>2</sup>を調査することとなったが、病棟造成時に、調査地域のかなりの部分を削平しており、また火山灰との色調の識別が極めて困難となり、明確に造構として判断できるだけの資料を得ることができなかった。そこで、ここでは出土した土器片について説明してみた。

### 1 出土遺物

- 1層 表土で、多くの雜物を含んでいる。
- 2層 造成時のもので、種々の土壤を成している。
- 3層 紫色熔結コラ層
- 4層 黄灰色ローム層
- 5層 茶褐色ローム層

#### トレンチ中央部では、

- 1層 黒色火山灰
- 2層 青灰色熔結コラ
- 3層 黒褐色火山灰層
- 4層 暗紫色熔結コラ
- 5層 黄灰色ローム層

### 2 出土遺跡（第7図・図版10）

11.

菱形土器の口縁部破片で、断面三角形の貼り付け凸帯をもっている。焼成は良好、色調は暗褐色を呈し、胎土は砂粒が多い。

12.

頸部より上部にかけてやや内向する菱形土器の口縁部で、頸部に台形状の一条の突帯をめぐらせていている。焼成・胎土とともに良好で紅褐色を呈している。この突帯は、貼り付けた後上下よりヘラで面取りを行ない、台形状にしたものと思われる。調整はヘラで縱方向と斜方向に行なっているが、ヘラとヘラの間にはススが付着している。

13.

胴部にきざみをもつ貼り付け突帯を有する菱形土器で、口縁部はわずかに内向している。器面はヘラの横方向での調整で仕上げられ、口唇部は平担に面取りされている。焼成は極めて堅硬で良好であるが、胎土は多くの砂粒を含んでザラザラしている。

14.

頸部に一条の三角突帯を有する變形土器で突帯を貼り付けた後、ヘラの横なで調整で仕上げている。色調は明褐色を呈し、焼成は良好であるが胎土に多量の石英・黒雲母などの砂質を含み、ザラザラしており、また所々に亀裂も見られる。

15.

頸部に、きぎみをもつ貼り付け突帯を有する鉢形土器の破片で色調は淡褐色を呈する。焼成は良好であるが胎土に多くの砂粒を含み、亀裂も見られる。

16.

鉢形土器の口縁部破片で、口縁部に黒斑がみられる。外面は調整が行き届き、ツルツルしている。胴部以下ではヘラの縱方向のでの調整が残って凹凸が見られる。色調は黒褐色を呈し、焼成は良好である。

17.

胴部以下を欠失しているが、變形土器で頸部で外反する形となる。口唇部は、ヘラで面取りされ、平坦になっている。内面はヘラによる横方向のでの調整が行なわれ、外面は口縁部付近では縱方向、胴部では横と斜方向のでの調整で仕上げられている。胎土は微粒であるが石英等を含んでおり、ススが大量に付着している。

18.

鉢形土器の口縁部で頸部はくの字形に外反している。ヘラによる横方向のでの調整を行ない、胎土は荒く、表面はもろくなり、多くの繊維痕もみられる。

19.

鉢形土器の破片で、胴部がはり、頸部はくの字状に曲折し、口縁端は内向するように整形し、その上にヘラ状のもので一条の沈線を施している。頸部より口縁部にかけてはヘラで横方向に、胴部以上は、斜方向に、のでの調整している。焼成は良好で、色調は赤褐色で上面はススが付着し、特に頸部が著しい。胎土は石英等の細石片が多い。

20.

台脚付鉢形土器で、底部と台脚部接合部にヘラによる調整のあとが残っている。色調は紅褐色を呈し焼成は良好であるが、胎土に多量の砂粒を含んでおり黒雲母等が目につく。

21.

台脚付鉢形土器でかなり大形であったと思われる。器体外面と底部内面はヘラにより縱方向のでの調整がみられ、台部内面はヘラによる横方向のでの調整を基に行なっている。色調は淡紅色で焼成は良好である。胎土は砂質がかなり含まれており、もろくなっている。台部の一部には黒斑もみられる。

22.

台脚付鉢形土器の台脚で、外面もヘラで調整したと思われるが、剥脱が著しく、明瞭に観察できない。内面はヘラによる横方向のでの調整が観察できる。胴部と台脚部の接合部で亀裂

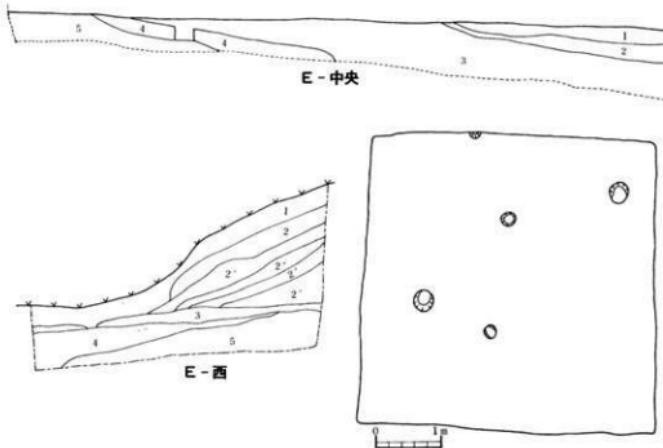
を見ることができる。表面の剥脱は激しいが、焼成は良好で色調は赤みがかった褐色を呈している。胎土は砂粒を含んで砂質が強い。

23.

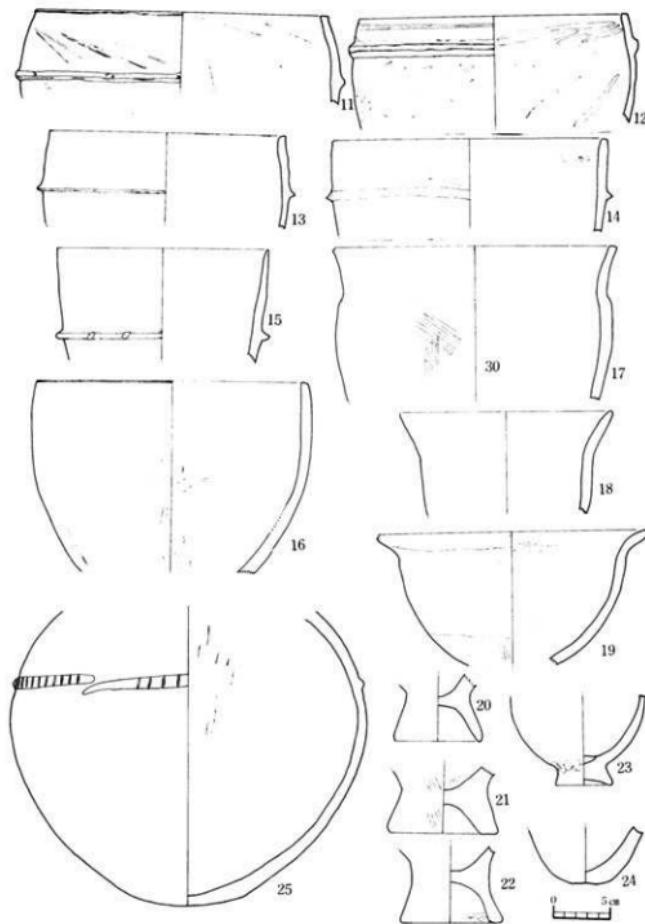
鉢形土器は、口縁部を欠失しているが胴部が丸みを帯びた壺に近い形態を呈す。浅いあげ底の台脚をもつが、底部と台の間は指頭痕跡が見られ、この台脚はつくり出しによるものと思われる。胴部の外面は凹凸が見られるが、ヘラ様のものでなでられ、内面はヘラによる横方向のなで整形で仕上げられる。台脚部は外面・内面とも指頭によってなでられている。色調は黄みを帯びた淡褐色を呈し、胴部と台脚部に各1ヶ所、黒斑を見る。焼成は良好であるが、胎土に黒雲母、石英などの砂粒を多量に含んでいる為、各所に亀裂がみられる。胎土中には、繊維質のもの5mm前後の細石粒なども含まれる。

24.

底部が丸底の鉢形土器で、ほとんど欠損にいる。器肉は厚くヘラによる荒い調整がなされている。胎土には多くの砂粒・石片を含んでいる。焼成は良好で、色調は褐色を呈している。



第6図 Eトレンチ西・中央壁実測図・Pit群



第7図 Eトレンチ出土遺物実測図

## 第7章 Hトレンチの調査（第8図）

HトレンチはEトレンチの北側に位置し標高は64mである。

調査は5×10mのトレンチを東西に設定した。

この調査区における所期の目的はEトレンチで出土した遺物の分布範囲を把握することであった。

その結果5層褐色粗粒質火山灰層中より数点の土器片が出土したのみであった。

### 1 層 順

1層 黒色火山灰が基盤となっており  
その中に現代の擾乱された土壤  
が混入していた。

2層 1層よりもやや白色の砂層で部  
分的に分布している。

3層 紫色の熔結したコラ層でいわゆる「火コラ」と呼ばれるものである。

4層 褐色の火山灰層で部分的に不規則に青灰コラ「青コラ」がはいりこんでいるが、一括して青灰色コラ層とした。

5層 褐色の粗粒質火山灰層

6層 黒褐色細粒質火山灰層

7層 黑褐色小粒質火山灰層

8層 暗紫色熔結コラ層

9層 暗黒褐色細粒質火山灰層

10層 黄灰色の粘質をおびた火山灰層

11層 西側部分にだけみられる青白砂層

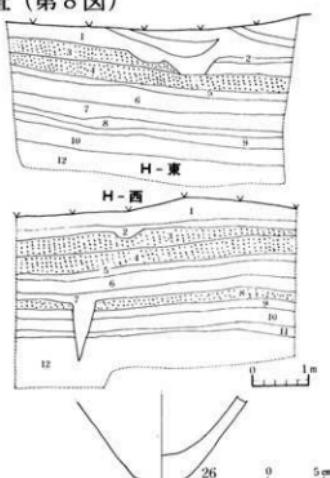
12層 茶褐色の粘質火山灰層

### 2 出土遺物（図版II）

26.

底部が尖底に近い鉢形土器で底部の最大部が2.7cmを測る。器面内外共に、縦、横、ななめ方向からヘラ状のもので整形され、特に外面は光沢を帯びている。

色調は明かるい褐色になり底部の左右に黒斑がみられる。焼成は良好であるが、胎土は荒く石英などの砂粒が表面に浮き出している。



第8図 Hトレンチ東・西壁実測図・出土遺物実測図

## 第8章 I トレンチの調査(第9・10・11図・図版2・3・4・5・11)

旧10号棟の北側で、造成工事に着工した鹿児島県開発公社の「発見」との連絡により、急搬出土した場所の東側に5×5.0mのグリッドを設け、その内の14個、350m<sup>2</sup>を調査した。その結果、この地区では、二つの文化層が存在することを確認した。まず、第2層の黒色火山灰層の最下部に存在する土師器、須恵器の文化層でPt群も存在した。つぎに、第8層の黒褐色火山灰層に、数点ではあるが、成川系の土器片が存在した。

### 1 層 順

- 1層 表土、腐植土により形成されていたが、ブルドーザーにより削平した。
- 2層 黒色火山灰層
- 3層 黄褐色粒質火山灰層、この層は一部に分布
- 4層 紫色熔結コラ層
- 5層 黄褐色の弱粘質火山灰層
- 6層 青灰色熔結コラ層
- 7層 褐色中粒質火山灰層
- 8層 黑褐色細粒質火山灰層
- 9層 暗紫色熔結コラ層
- 10層 黄灰ローム層
- 11層 青白砂、部分的に分布
- 12層 茶褐色ローム層

### 2 出土遺物(図版5・11)

27.

平底の土師坏で、ロクロにより巻き上げられている。焼成・胎土ともに良好で、色調は赤褐色、外面の胴部より上にかけてはススが付着して黒くなっている。

28.

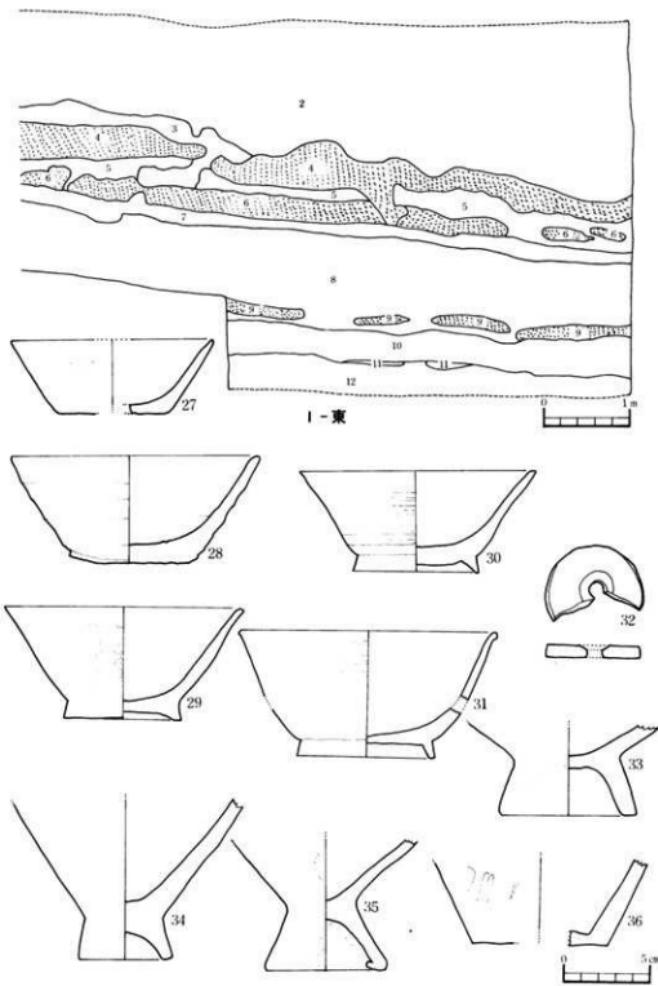
口径13.7cm、底部径7.3cm、高さ5.8cmの高台付土師坏であり、きめの細い胎土を用いているが、所々に5mm前後の石粒が混入している。内面の調整は入念に行なわれているが、外面では下半部に凹凸が見だっている。色調は淡褐色。

29.

淡紅褐色を呈する土師坏で、焼成は良好で胎土もきめの細いものを使用しているが、5mm前後の石粒が数ヶ所に見えていている。底部の仕上げが粗雑なため、一見貼り付けたような形となり底面も凹凸が激しい。

30.

口径13.8cm、底部径6.8cm、高さ6.5cmを測る高台付土師坏である。巻き上げ調整の痕もよく残っている。内面は黒く仕上げられた、いわゆる内黒土師で入念な調整が施され、光沢をも



第9図 Iトレンチ東壁実測図・出土遺物実測図

ちツルツルしている。色調は淡黄褐色を呈し、焼成は良好である。

31.

高台付土師杯で、口径15cm、底部径8.2cm、高さ7.2cm、高台高0.8cmを測る。きめの細い良質の胎土を用い、色調は淡褐色を呈し、内面には丹を塗っている。

32.

紡車の破片で、一部を欠失している。直径5.7cm、中央孔0.8cmで土師杯の底部を再利用している。

33.

鉢形土器の台脚部で、焼成は良好であるが、胎土に砂粒が多く剥脱が激しい。

34.

台脚部で、胴部はかなり開いている。調整はハラで各方向に行ないその時のダマが残されている。色調は灰褐色で焼成は良好である。底部と台脚の接合部分に亀裂が生じている。

35.

台脚部で、入念な調整により光沢をもっている。焼成は良好、淡褐色を呈している。

36.

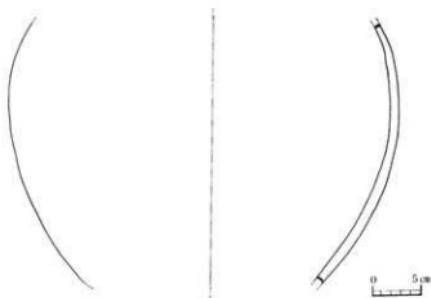
平底の鉢形土器で、全面に凹凸がみられる。

37.

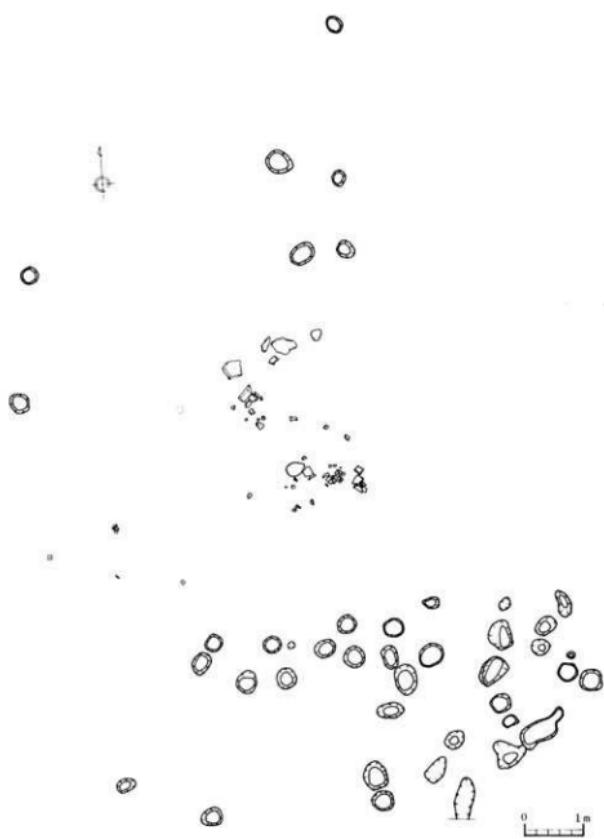
須恵器の甕で、外面は条痕叩き、内面は上部は青海波、下部は条痕の叩がみられる。

#### 遺構（第11図・図版11）

須恵器片とともに、多くのPit群を検出したが、遺構の再現までいたっていない。特長として、かなりの傾斜地に乱立していた。



第10図 トレンチ出土須恵器実測図



第11図 トレンチ出土遺構実測図

## 第9章 特別地点の調査(第12・13・14図・図版6・7・12・13・14)

この地点は新校舎敷地の境界に相当する部分で、側壁工事中に発見された場所である。その結果この地域がこれまでの調査した地点内で最も濃密に分布していることがわかった。しかしながら地域外という条件もあり遺物の採集にとどまった。

### 1 層位

- 1層 表層
- 2層 黒色火山灰層
- 3層 紫色熔結コラ層
- 4層 褐色ローム質火山灰層
- 5層 青灰色熔結コラ層
- 6層 黒褐色火山灰層
- 7層 褐色中粒質火山灰層、この層が包含層である。またこの地域は、尾根に続く傾斜地に相当し、かなりの角度をもっている。

### 2 出土遺物(図版12・13・14)

38.

口径23.5cmの壺形土器であり、頸部に貼り付けの凸帯をもち、貝殻の押圧による刻みを施している。胎土は、良質のものを用い、ヘラの横方向での仕上げによりツヤのある表面をなし茶褐色を呈している。

39.

頸部より口縁部にかけて、わずかに内向する壺形土器の破片で、頸部に刻みをもつ一条の凸帯をめぐらしている。胎土は、わずかに黒雲母の細粒を含んでいるが良質のものを用い、焼成も良好で、光沢をもっている。調整もていねいに行ない、表面にススの付着をみると、本来は丹塗の土器だったものと思われる。

40.

頸部に、断面が台形状の貼り付け凸帯をめぐらした壺形土器で、この凸帯は、結合しない。器体は、ヘラの縦方向での調整で仕上げられ、焼成は良好で、ススの付着がみられる。

41.

頸部に、丸みをもつ一条の貼り付け凸帯をもつ壺形土器で、内外面ともヘラの横方向での調整を施している。焼成は、かなり良く行なっているが、胎土に多くの砂粒を含んでいるために、ザラザラしている。

42.

口縁部をわずかに欠失するが、短頸の壺形土器と思われる。底部は丸底となり、全体に器肉

は厚い。内面調整の不ぞろいが目立ち、頸部では、はりつけの指頭の痕が点々と残っている。また、ヘラ調整の痕が残り内面は凹凸が激しくみられる。底部に近い所に、各一ヶ所の黒斑がみられる。

43.

頸部よりなだらかに外反する鉢形土器で、赤褐色を呈する。内面では、横方向での調整を行ない、頸部では、段がついている。外面では、縱方向のなで調整を行ない、焼成は堅緻で良好であるが、胎土が荒く石英などが浮き出ている。

44.

鉢形土器の口縁部破片で、わずかに外反する器形となっている。焼成はやや弱く、また、胎土も砂粒などが多く、そのために表面が剥落している。

45.

胸部がふくらみ、口縁部が外反する、菱形土器の破片で色調は、褐色を呈している。この土器も、表面の剥落が激しく、軟弱になっている。

46.

丹塗り高杯で、一部を欠いているがほぼ完全なものである。高さ15.0cm・坏部の口径14.2cm・脚部端の径10.2cmを計る。坏部は、高さ4.5cmと割に深く、口縁部と底面の間に明瞭な線をもち、外反しながら口縁端にいたる。脚部は、長い筒部からゆるやかに広がりながら脚端にいたり、内部は接合部近くまで空洞になっている。坏部と脚部は別々につくられており、接合部に近い所の筒部は若干ふくらみをもつ。坏部の内・外面、脚部の外面はヘラによってていねいになされ、その上に濃い紅色の丹が塗られている。脚部の内面はヘラでなでられ、脚端に近い所のみに丹がみられる。

47.

大形の高杯の坏部と思われ、口径27.0cm・坏部の高さ10.0cmを計る。この坏の場合は、底面から口縁部にかけてゆるやかに外反していくが、口縁部の割合が大きくなっている。内面ではヘラによりなでられているがその仕上りは荒く凹凸が目立つていて、外面では、ていねいにヘラでなでられている。底面の一ヶ所に黒斑がみられる。

48.

楕形土器で、丸底になっている。器形は、胸部が軽くふくらみ、口縁部で外反している。器肉は薄く、胎土・焼成とも良く、紅褐色を呈している。

49.

菱形土器の台脚部破片で、台脚部末端で外反する形となっている。調整はヘラにより、上部で縱方向、下部で横方向にて、焼成は良好であるが、胎土に多くの砂粒を含んでいたために浮き出している。

50.

平底の鉢形土器と思われる。色調は、淡褐色を呈し、光沢をおびている。焼成は良好である

が、胎土に黒雲母等の砂粒を多く含んでいる。

51.

台脚付鉢形土器で、台脚はやや内向し、底面の内側には、未調整の「はみだし」が残っている。また、内・外面の各一ヶ所に黒斑もみられる。淡紅色を呈し、焼成は極めて良好である。

52.

鉢形土器の台脚部で、外面に、ヘラによる縦方向ながみられ、調整は荒く、凹凸がみられる。内面は、横方向になでられている。焼成は良好であるが、胎土は荒く、砂粒が浮き出ている。

53.

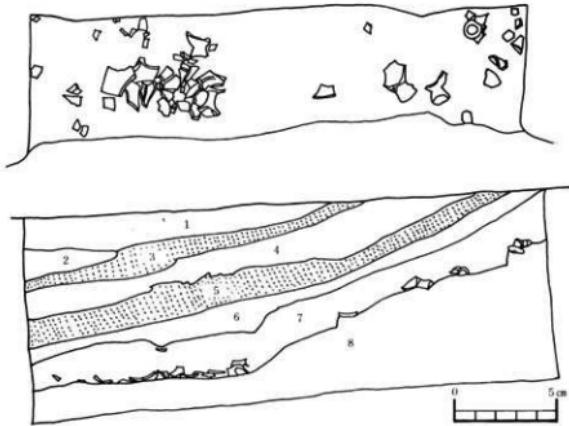
小形の鉢形土器の台脚部で、上げ底ふうに低くなっている。台形の整形は、指頭により広げられた後、ヘラ状のもので調整している。多くの亀裂がみられるが、これは胎土の粗雑さによるものと思われる。

54.

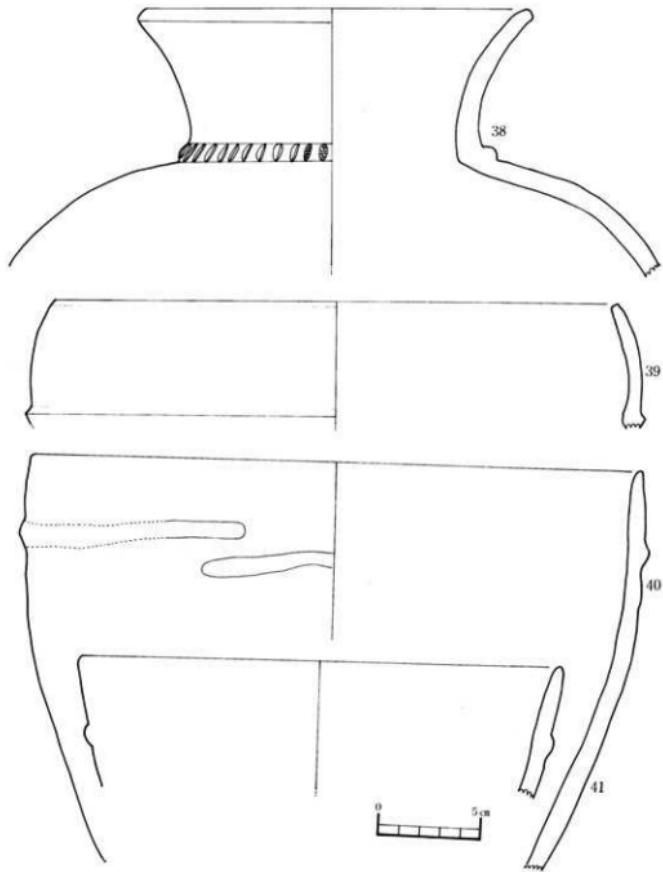
浅い上げ底をもつ台脚で半分は欠失している。この欠落した部分では、底部の上に台脚をはりつけた痕を観察することができる。

55.

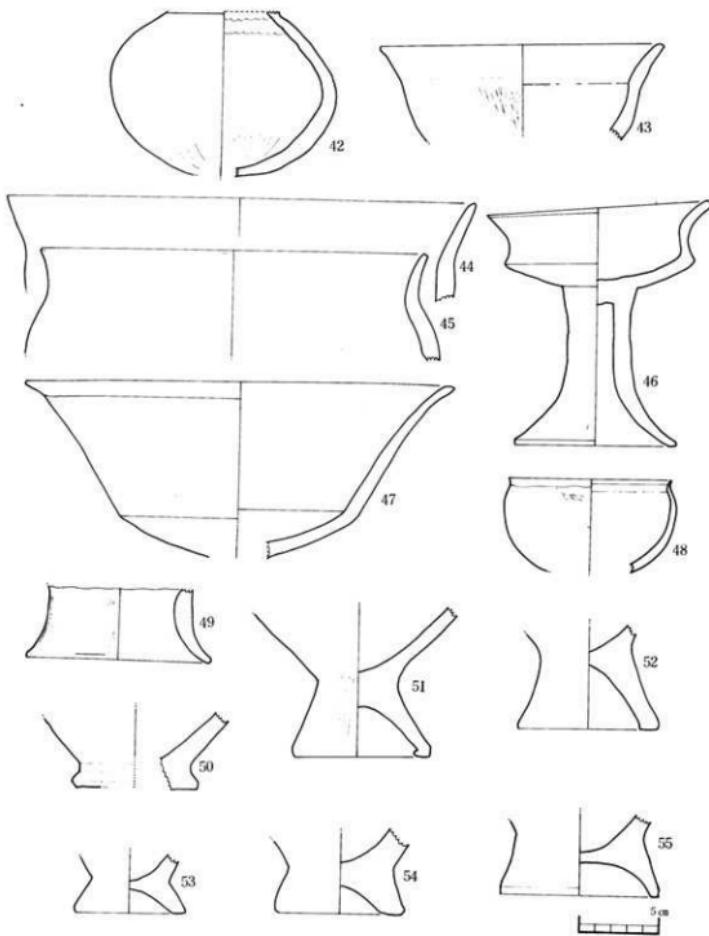
鉢形土器の台脚部で、外面は、ヘラによる縦方向での調整が施され、紅褐色のツヤのある色調を呈している。内面も黒褐色の光沢をもっている。



第12図 特別地点遺物出土状況と土層図



第13図 特別地点出土遺物実測図



第14図 特別地点出土遺物実測図

## 第10章 ま と め

以上、県立指宿養護学校の設立に伴って発掘調査した新番所後遺跡についてその概要を記したが、広範囲な上に火山灰地帯という特殊な条件も重なり、限定された範囲でしか調査できなかつた。したがつて遺構や出土遺物の量は少なかつた。しかし個々の遺物は貴重であり、この報告の作成を行なつた。

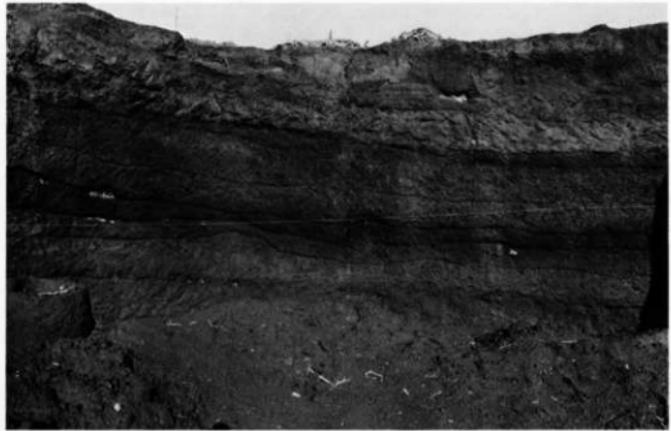
調査は、旧病棟の残存するなかで、そのわざかな間をぬつて行なわねばならぬという条件のもとにあり、草木が繁茂していたために困難を加えた。したがつて調査できる地域は、おのずと限定されることとなり、校庭となつていた旧10号棟の東南部にAトレンチを設定することとなつた。

Aトレンチでは2つの文化層があり、弥生時代後半と弥生時代中頃の文化であった。

まずその1つは、第9層・第10層を中心とする成川系の土器文化であり、この文化層までの深さは-3.5mであった。次に第15層の中に深さ-6.0mに存在する山之口系の土器文化であった。しかし、この文化層までは-3.5m、-6.0mという我々の当初の予測をはるかに上回つてしまつた。さらに-3.5mに達するには、山礫でも火花を散らす二枚のコラ層を取り扱わねばならなかつた。

1地区では、黒色火山灰層の下部に土師式の土器文化が柱穴状の遺構を伴つて存在したが、色の識別が極めてむずかしく十分に検出したとは言えない。また最後の工事中に発見された部分では、敷地外に文化層が残存している。

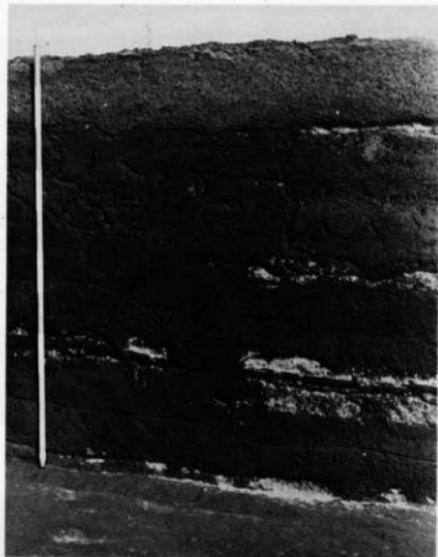
このような条件のなかで今回調査を行ない、知ることのできた当時の社会の様相は、そのほんの一部にすぎなかつたのである。



図版1 Dトレンチ調査風景・土層



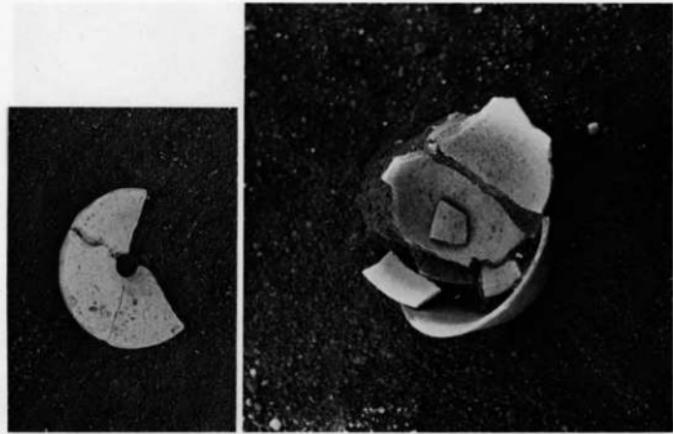
図版2 1 トレンチ調査風景



図版 3 トレンチ東側土層



図版4 1トレンチPit群



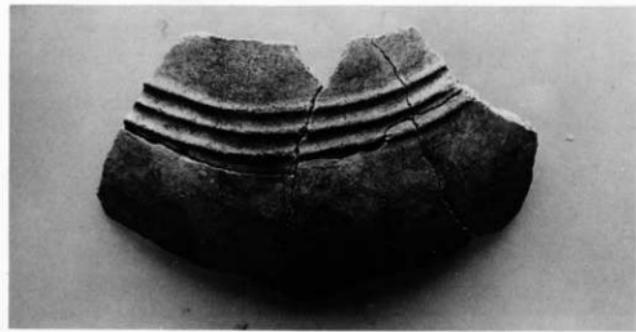
図版 5 トレンチ須恵器・土師器・紡垂車出土状況



圖版 6 特別地點遺物出土狀況

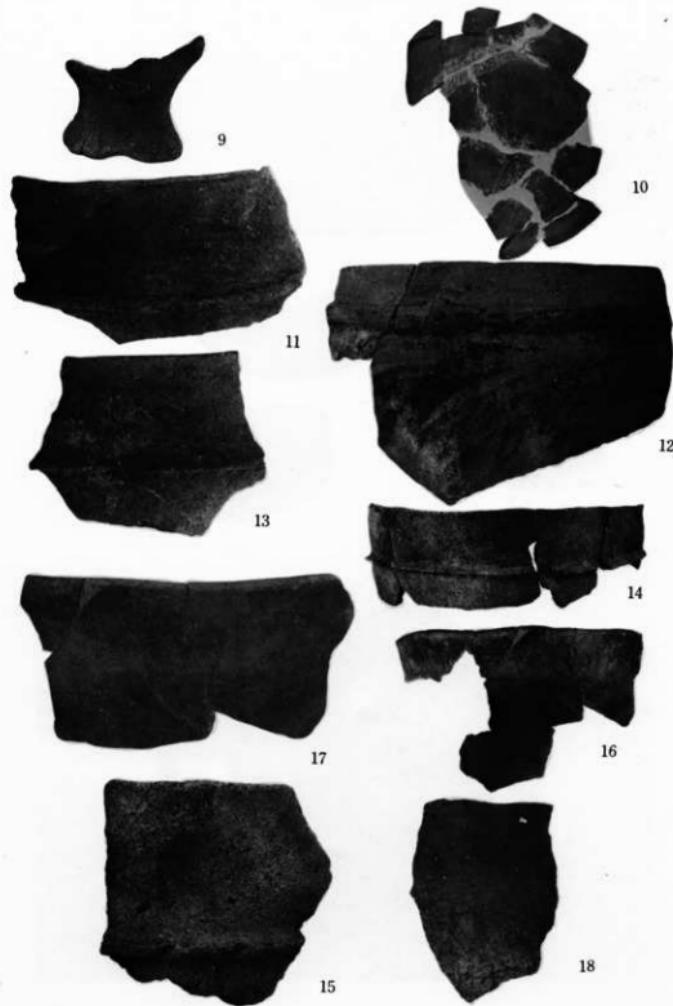


圖版 7 特別地點遺物出土狀況



図版 8 A トレンチ出土土器・石器

7



図版9 C・D・Eトレンチ出土土器



20



21



22



23



24

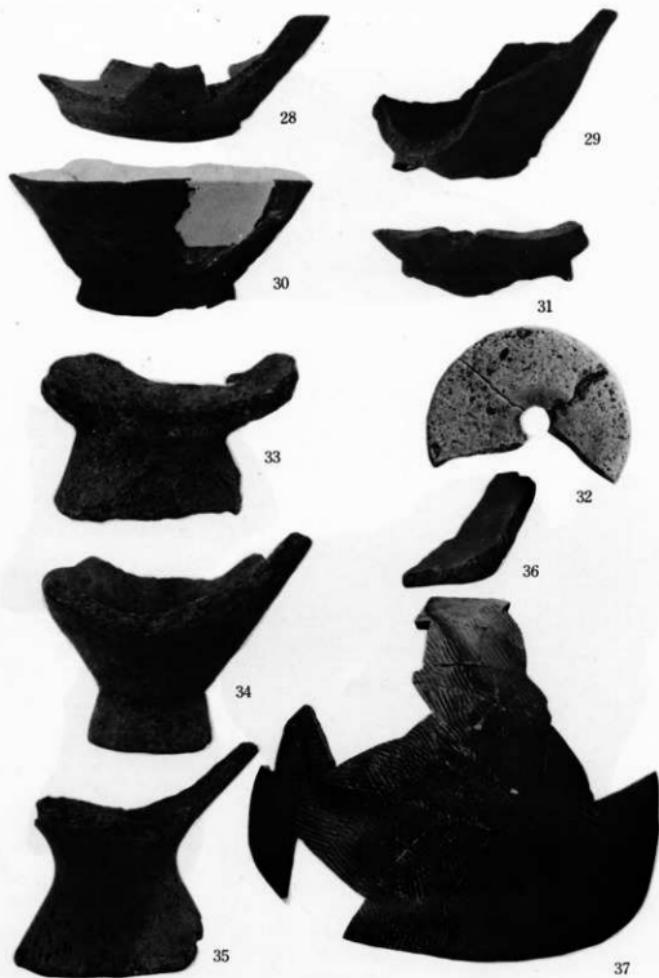


26



25

図版10 E トレンチ出土土器



図版II-1 トレンチ出土土器



38

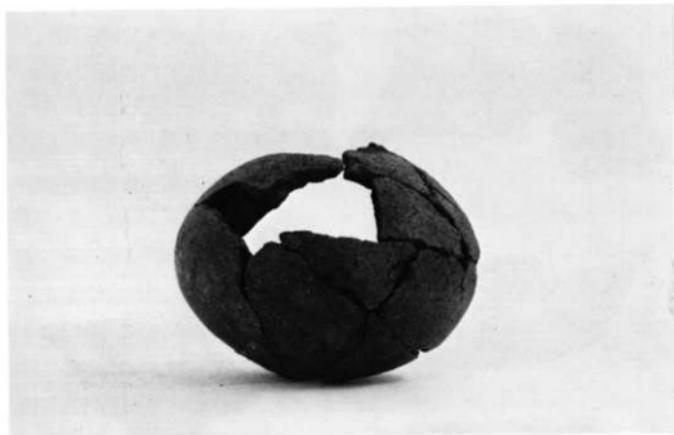


40

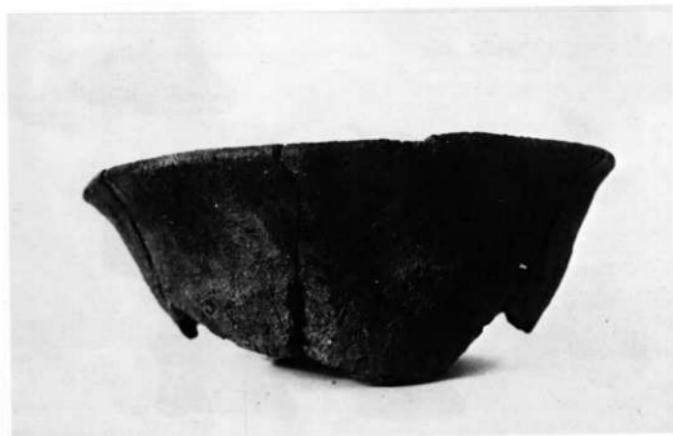
41

45

圖版12 特別地點出土土器

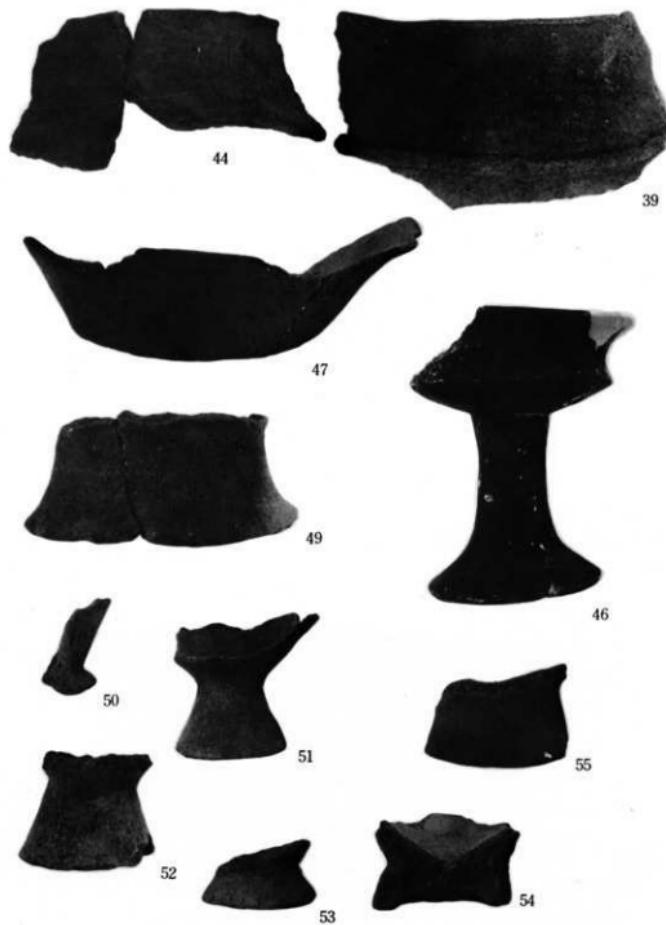


42



43

圖版13 特別地點出土土器



圖版14 特別地點出土土器

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(4)

新 番 所 後 遺 跡

県立指宿養護学校新設に伴う発掘調査報告書

発行日 昭和52年2月28日

発行 鹿児島県教育委員会 〒892 鹿児島市山下町14番50号

印刷 (有) 昌和堂印刷 〒890 鹿児島市宇宿二丁目16-11